

---

# アリス

田中ひろし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アリス

### 【著者名】

NO682C

### 【作者名】

田中ひろし

### 【あらすじ】

暗い。日々の忙しさもない。サラリーマンのお話。短編。

電車で耳にしたヘッドホンから、アメリカ人の歌声が聞こえてくる。女性の透き通るようなきれいな声だ。まるで歌手が本当に耳元で歌っているかのように、僕の鼓膜を伝つて脳に心地よい刺激をあたえてくれる。電車の窓の外では風景が走り去つて行く。ビルやマンションが通り過ぎ、鉄橋にさしかかつて川が見える。また街が見えてきて、小さな人や車が見えてくる。

会社についたら何をしようかな。満員の電車の中、吊革をつかめないポジションに立つてしまつた僕は、後ろのサラリーマンに寄りかかりながら考えた。考えたとは言つても、結論はすでに知つていた。なにもないのだ。席に座つてパソコンを適当にたたき、なんとなく頼まれた「コピーを取り、同僚との会話もろくにせず家に帰る。そんな毎日が延々と続いているのだ。僕にはこんな日々から抜け出す方法など見当たりもしなかつた。

そういうえば、さつきから聞こえる音楽も流れようでいいのだが、なんとなくパンチがない。歌詞だつて英語だから、何を言つてののか意味がわからぬ。流れいく景色も時速100キロで一瞬にして移り変わる。その一コマ一コマを切り取つて味わおうとしても、到底僕の脳には処理しきれない。あれ、今僕はどこにいるんだつける？満員の電車に乗つていたはずなのに、急に真っ白な空間に一人だけ立つてゐる気がしてきた。そういうえばイヤホンも耳から外れている。サラリーマンに寄りかかっていたはずなのに、僕は支えを失つてそのまま地面に後頭部から倒れていつた。さらに僕の倒れたところにはちょうど穴があいていたようで、僕は真っ白の中を逆さまに落ちていつた。落ちてゐるはずなのに、風も感じない、音もしない。不思議の国のアリスにこんなシーンがなかつたつけ？確かにこのあと不思議な世界に迷い込むんだつたな。そんなことが頭をよぎつた……。

穴の底はさつきの満員電車だった。元の場所にいつの間にか戻つてきていた。なんだ、つまらない。どうせならアリスト同じように、いや、もうハリー・ポッターとか、ドラえもんとか、なんでもいいから違う世界とあの穴がつながつてたいらよかつたのに。自分でも考えていることのくだらなさはわかつていた。でもむづこんだ空虚な世界にはつとめだりだ。

会社についても誰も僕に挨拶をする人はいなかつた。自分から挨拶することもないから、自然に周りの人も僕に声をかけなくなつていつたのだ。部長は奥のほうから僕のことを睨むように見ていた。クビになるのは何日後だろう。部長の視線を無視して、僕はデスクに座つた。とりあえずパソコンを立ち上げアリスと200回打ち込んでみる。なにも起こらない。10分もかからなかつたので、次は1000回打ち込んでみた。やはり何も起こらなかつた。時々入る「ピー」の仕事をかたづけながら、僕は昼までそんなことを続けた。画面にぎゅうぎゅうづめにされたアリスの三文字は、なんとなく一つの作品として完成していいる気がする。誰にも価値が見いだせない僕だけの芸術。パソコンの画面は僕にしか見えない七色の光を放つていた。

昼休みになんとなく屋上へ出てみた。風のない日だつた。屋上には誰もおらず、すすけたコンクリートの地面がただ広がつている。いつの間にか僕は手すりを乗り越えてその一番端に立つていて。下のほうから、なぜか風が吹いているのを感じる。眼下の道路を歩く人々の表情も、七階建てのビルの屋上からだというのにはつきりと見えた。街路樹もやけにあざやかである。あんなに縁がきれいに見えたことは今まで一度もない。眼下の景色は僕の脳に鋭い刺激をいくつも送り込んできていた。朝、イヤホンが僕の脳に送りこんできたものとは全く異なる刺激である。これ以上の快感がこの世にあるものか。そう思わせてくれるほどに、その刺激は僕の脳を支配していた。

飛び降りる決断を下すのはさほど難しくなかつた。今僕は強烈な風を感じて急降下している。あの真っ白な空間を落ちていくのとはわけが違つた。車の走るエンジン音が耳に飛び込んでくる。いつも聞いている音なのに、それがなぜか爆音に聞こえた。さらにそれは自分が風を切る音と相まつて、僕の鼓膜と脳を覚醒させていく。怒涛のように押し寄せてくる興奮が時の流れさえも妨げていた。どうせ一瞬で地面に着くと思っていたが、まるで宇宙から飛び降りたかのように、僕は急降下しつつも長い時間その興奮を楽しむことができた。地球が僕に迫つてくる。はつきりとそれを感じる。

そしてフィナーレはやつてきた。僕は頭から地面に衝突した。今までとは比べ物にならないほどの衝撃の渦に僕は巻き込まれている。頭蓋骨がはじけ飛んで、脳がぶつ壊れた。体中の骨が連鎖的に爆発して、僕の肉体を粉碎していく。内蔵は骨の爆発の熱で蒸発し、気体と化した。血液は体外に吹き出し、手も足も耳も鼻も、とつとうすべてが破滅した。

僕のデスクの上では、パソコンが煙をふいていた。画面上のアリスの文字は消えさせていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0682c/>

---

アリス

2010年10月8日15時07分発行